

琉球大学学術リポジトリ

琉球諸島の民話と星

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2014-09-12 キーワード (Ja): 星, 星座, 由来譚, 運命譚, 星女房 キーワード (En): 作成者: 山里, 純一, Yamazato, Junichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/29575

琉球諸島の民話と星

山 里 純 一

Junichi Yamazato

Stars in Ryukyuan Folktales

琉球諸島の民話には星を題材としたものが多い。その中には「天人女房」のように、中国や日本本土の影響を受けたものもあれば、琉球諸島独自の星や星座の由来譚、または季節や物事のたとえとして語られ、伝承されたものも少なくない。こうした多様な民話を生み出した背景には、星や星座の運行を観察することによって時節や気象を知り、農業や航海の日安とした琉球諸島の人々の暮らしがあった。

キーワード：星 星座 由来譚 運命譚 星女房

はじめに

琉球王府が各地の伝説・昔話を収集して著した『遺老説伝』には、国頭郡辺戸邑北方の宇座原地に空から星が落ちてできた穴があるという話が収載されている。星に関する文字化された説話はこれが唯一であるが、民間においては星を取り上げた豊かな伝承が多く残っており、それについて紹介した論考もある¹⁾。しかしこれまで紹介された民話以外にも伝承事例はまだまだある。ここでは琉球諸島における星に関する民話を可能な限り拾い上げ、どのような星座や星がどのように民話の中で取り入れられているのか、その伝承の経路や背景を踏まえながら考察していきたい。

¹⁾ 禰晴一郎「沖縄の天体説話」(『沖縄民話の会会報』8)、丸山顕徳「沖縄の星の神話」(篠田知和基編『天空の世界神話』八坂書房、2009年)など。

一 星座・星の由来

(1) ニヌファブシ（北極星）

【例話1】

昔々、ある村に二人の兄弟がありました。二人の幼いころに、お父さんが亡くなったので、お母さんは散々苦勞して二人を育てました。

兄弟はこうして成人しましたが、兄は働くことのきらいな怠け者、何をしてもなく、毎日をおぼろおぼろして遊び暮らしていました。

ところが、弟は親思いの働き者でありました。お母さんがなりふり構わずに働いて、ずいぶんと難儀苦勞して自分たちを育てて下さったことを、子供のころから有り難く思っていました。それで成人すると、人一倍お母さんを大事にして、孝行をしていました。

ところが、お母さんはある日急病で、二人の子供に見守られながら亡くなってしまいました。兄弟は嘆き悲しみましたが、とりわけ弟は、身も世もあらぬ程、泣いて泣いて、泣きじゃくっていました。

泣く泣く野辺送りをすませましたが、弟は日がたつに連れて悲しみは募るばかりで、朝夕泣き悲しみ、仕事も手につきません。

こうしたある日、みすほらしいなりのおばあさんが、ひょっこり弟の前に現れて、

「あなたは一体、何がそんなに悲しくて、毎日泣き暮らしているのですか」と、わけを尋ねました。

みすほらしいなりはしているものの、その慈愛に満ちあふれた、おばあさんの顔を見た弟は、

「大事なお母さんを亡くしたのです。お母さんに又と会うことの出来ないのが悲しいのです」と、泣き泣き答えました。するとおばあさんは、

「それは何ともお気の毒ですが、人は誰でも、いつかは死なねばなりません

ん。それが人の世の定めです。でも、あなたはそんなにお母さんに会いたいのですか」と、言うので弟は、

「おっしゃることはよく分かります。しかし、亡くなって会えないからこそ悲しいし、ぜひもう一度会いたいとも思うのです」と、答えました。すると、このみすぼらしいなりのおばあさんは、

「よくわかった。よし、それでは私が合わせてあげよう。兄さんも一緒においでなさい」と言って、二人を大きな川の岸に連れて行きました。川岸には一そうの舟がつながれていました。

おばあさんは、その舟を指さして、

「さあ、この舟にお乗りなさい。私も一緒に行きましょう。お母さんは向こう岸にいます」と言って、二人をうながしました。

兄弟が、

「ほんとにお母さんに会えるのでしょうか」と、尋ねますと、

「きっと会えます。間違いありません。しかし、この川は大きいし、流れは早い。一生懸命こがなければ、とても行き着きませんよ」と、答えます。

「お母さんに会えるのでしたら、何の、これしきの川、なんでもありません」と、二人は喜び勇んで舟に乗り込みました。

お母さんに会いたい一心で、二人は櫂をとって懸命にこぎました。しかし、こいでも、こいでも、川幅は広く向こう岸は遠く、なかなか近づくことはできません。二人はだんだん疲れてきました。するとおばあさんは、

「しっかりこぐんだ。ここでへたばっては、これまでの難儀がむだになる。お母さんに会いたければ、もっと元気を出せ」と、励まします。

二人は元気をだし、力を出してこぎました。けれども、お母さんがいるという向こう岸ははるかに遠く、二人はしだいに力が弱り、舟の進みはだんだんにぶります。

とうとう兄はへたばってしまいました。

「駄目だ。いくらこいでも舟は前に進まない。もうやめた、お母さんが向こ

う岸にいるというのも、恐らくうそだろう」と言って、櫂を投げ出し、舟の中で寝そべってしまいました。しかし、弟はあきらめません。歯をくいしばり、ありったけの力を出して、こぎ続けました。

二人でこいでも、なかなか進まないのに、一人だけになって、舟あしはだんとおちました。それに、だんだん疲れがでて力は弱くなり、舟は川に押し流されはじめました。これはいかぬと、懸命になってこぎましたが、もう力が及びません。舟はぐんぐん流され、遂に大きな滝の上に来てしまいました。

川は目の前できれ、「ゴゴーツ」と物凄い音を立て、滝となって流れ落ちていきます。

とうとう二人の乗った舟は滝にのみ込まれました。

「ああ、駄目だ」と、弟が叫んだその時、おばあさんは、手をさしのべ、さっと弟をだきとって、天に昇っていきました。

そして、

「あなたは実に立派だ。世の中の手本になる人だ。あなたはこれからは、ここから動かずに、すべての人の目あてになりなさい」と言って、大空の真北に連れていって北極星にいぬふぶしにしたということでもあります。

一方舟の中で、ふて寝をしてしまった兄には、

「お前は、もっと苦勞しなさい」と言って、川の中にそのまま残しておきました。

いまでも、大空の天の川の中に、多くの星から離れて、一つだけさびしく光っている星がありますが、あれがあのだ兄さんだということでもあります。

(竹原孫恭『はがー島 八重山の民話』私家版、1978年)

これは石垣市白保の米盛一雄（明治44年生まれ）が語る「ニヌファブシの由来」である。

沖縄本島の教訓歌として有名な「ていんさぐぬ花」の歌詞には、夜間に航

海する船は「ニヌファブシ」（子の方の星すなわち北極星）を目当てにするという一節があるが、北極星は多くの人が仰ぎ見る星である。そのため天帝は、親孝行で働き者の弟を北極星とした。一方、親不孝でなまけ者の兄を、天の川の中でポツリと存在する星としたという。恐らく、はくちょう座の一等星デネブのことであろう。こうした北極星とデネブを対照的に捉え、これを弟と兄に対比させているのである。

話者の米盛一雄氏は、この話を祖父から聞いたということだが、琉球諸島では、これ以外に聴取例はない。管見によればアイヌの人々の間に、これとそっくりの話が伝承されている⁽²⁾。但し末尾の部分に差異が見られ、アイヌの民話ではわし座の $\alpha\beta\gamma$ 三星に擬せられる。すなわち女神が化けた老婆が α 星（アルタイル）で、名前をウナルベクサ・ノチウ（川を渡す老婆の星という意味）と言い、その東側の暗い四等星は（ γ ）忘れ者の兄で、西側の明るい三等星は働き者の弟であるという。すなわちアイヌの人々は、一つの星座の中の星の明るさに着目したのに対して、本民話では、人々の目標となる星と、川に取り残された星とした点に独自の発想が見られる。

次に、同じ白保出身の崎原久（大正7年生まれ）は、これとは異なる北極星の話の方言で残している。その梗概は次のようなものである。

【例話2】

昔、オモト岳の東辺の底原田と言う処に、母親と六つになる男の子と四つになる女の子の三人が暮らしていた。住まいの周りを鋤で耕して作物を植え、うるずんの季節になると田たにし螺なを拾って来て、煮て食べ、冬は鮎あなを取って来てだしにして食べ、暮らしていた。

梅雨で毎日雨続きのある晩のこと、夕方になってやっと雨があがったので、母親は、薪を取ってきて汁鍋を作ろうとしていたら塩がない。そこで桃

⁽²⁾ 末岡外美夫『人間達のみた星座と伝承』（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構助成、2009年）394～399頁、野尻抱影『星と伝説』（偕成社、2005年）。

里村に塩を借りに出かけようとする、北の方から雨が降ってきて、やがて雷雨となった。母親は、稲光りに怯える子どもたちに「あれはお母さんが光らせているのだから心配しないで待っているのよ」と言ってお出かけた。しばらくして天気は回復したが、母親はいつまでたっても戻ってこなかった。夜になるとフクロウも鳴き、あたりは一寸先も見えない真っ暗闇になった。弟が泣けば姉も泣き、泣くだけ泣いて、叫ぶだけ叫んだら、声はかれ、くたびれて二人は土間にそのまま寝てしまった。そしてお母さんが北の天の上に縛られて身動きもできずにいる夢を見る。

夢で目が醒めた二人は、夜が明けると、お母さんの名を呼びながらオモト岳の頂上に登った。たまたま竹を刈りにやってきた桴海村の前盛家のヌサーという若者が二人の子どもを見つけ、桴海村に連れて帰り、ヌサーの家で育てた。やがて女の子は十七才になって前盛家の嫁となり、多くの子供を生み前盛家は繁盛した。男の子は八重山から琉球王府へ貢納物を運ぶ上納船の船頭となった。

ゆるばらす	ふにや	夜航海する船は
にぬばぶし	みあてい	北極星を目当てにして
ばぬなせる	あほや	私を生んだ母親は
ばんどう	みあてい	私を見守っている

これは、船頭となった男の子が、夜、大海原を航海中に母親のことを思い出し、心の中から湧き出た歌ということだ。

(『白保村風土記』白保村風土記刊行会、1994年)

^{すくばるだ}底原田で暮らしていた母親が雷雨の中、桃里村に塩を借りに出かけたまま戻らず、子供たちは母親が天北に縛りつけられている夢を見て、母親が北極星になってしまったことを悟るという内容である。母親がなぜ北の天空で身動きできない状態にされてしまったのか、その理由は述べられていない。あるいはこの母親はもともと天女であったが、下界に下りて人間との間に子供

を生んだため天帝の怒りを買ったのであろうか。子供のうち女の子は前盛家の嫁になり、男の子は上納船の船頭になったというのは、地上に残した子供が始祖になる昇天型の天人女房と似た点がなくはないが、母親の素性や子供を生むまでの過程も一切なく、天人女房に含めてよいか疑問なしとしない。末尾で「ていんさぐぬ花」の歌詞の一節の由来を語っているのも民話の中では珍しい。

（2）ナナツブシ（北斗七星）

【例話3】

昔、伊是名島に銘苺子という農夫がいたそうだ。ある日、川原に行ってみると、そこで髪を洗っているとても美しい女を見つけたそうですよ。羽衣が松の枝にかかっているのを見て、この人が天女だということはすぐにわかったそうだ。「これは何とかしてその羽衣をかすめ取ってでも家に持ち帰って隠し、女に見せないようにしていれば、いつでもここにいて自分の妻にすることができる」と考えて、その羽衣を家に持ち帰って稲倉の中にわからないようにして隠し、その天女は羽衣がなくなったので天に帰ることができなくなり、銘苺子が考えていたとおり、銘苺子の妻になったということだ。

そうするうちに二人の子供が生まれて、子守の子守歌の中で、

いった一母あ飛羽衣や 粟倉の下なかい かじみていあんどー

と歌っているのを聞いて、「ああ、羽衣はそんなところに隠してあったのか」とわかったようだ。

銘苺子が畑に出ていたときだったので、「よし今だ。今のうちならふたたび天に飛んで帰ることができるから、銘苺子が帰って来ないうちに飛んでいってしまおう」と思って、羽衣を探してみると、隠された所にちゃんとあったそうだ。「今のうちだ」と言って、その子供たちが眠っているうちに羽衣をつけて飛ぼうとするが、子供たちと別れるのがあまりにもつらくて、

飛び上がっていくがまた思い直して下りてきたりして、それを何回か繰り返すうちに、銘苺子が帰ってくるといけないからと飛び上がっていくと、そのときには子供たちは目を覚まして、「お母さん、お母さん」と大きな声で呼んだが、もう呼び戻すこともできなかった。

飛びあがっていきながら、「私がおまえたちをそこに残していくのはとても心もとないことだが、天に帰らなければいけない。私が天に昇って行ってどこにいるかということは、おまえたちにはすぐにはわからないから、天の七つ星の二番目にある大きな星と小さな星が二つくっついている星を、私だと思いなさいよ」と言ったという。やはり地上で妊娠していた子供が天で生まれたことになったんだなあという話になっているんです。北斗七星と言っていますけどね。あの星を子抱き星と名づけたらしいです。まだ七つか八つごろの幼い時分に、私のお婆さんから聞いたんです。（『とかしきの民話』渡嘉敷村、1983年）

これは渡嘉敷島の与那嶺勲（明治35年生まれ）が語る「天女と七つ星」である。

ところで福田見によれば、日本の天人女房は次のように分類されるという⁽³⁾。

I 天女昇天型

- ①男の飛衣隠匿 ②天女と結婚・子供誕生 ③羽衣露見
- ④天女の昇天・離別

II 再会型

- ①男の飛衣隠匿 ②天女と結婚・子供誕生 ③羽衣露見 ④天女の昇天
- ⑤父子の昇天 ⑥再会

III 難題型

- ①男の飛衣隠匿 ②天女と結婚・子供誕生 ③羽衣露見 ④天女の昇天

⁽³⁾ 福田見『神語り・昔語りの伝承世界』（第一書房、1997年）

- ⑤父子の昇天 ⑥舅の難題 ⑦難題失敗・七夕由来

IV 七星型

- ①天女の降下 ②天女と結婚・子供誕生 ③羽衣露見
④天女の昇天・離別 ⑤七つ星由来

南島（奄美・沖縄地方）の天人女房の伝承例を見ると、Ⅱ再会型とⅢ難題型は少なく、大半はⅠ天女昇天型に属するものである。天女昇天型は始祖伝説と結びつくものが多い。例えば、奥間大親の妻となった天女が地上に残した男の子が浦添按司となり、やがて英祖王統を滅ぼして中山王となった察度であるとか、銘苺子と天女の娘が第二尚氏王統三代目の尚真王の夫人となったとの伝承がある。

【例話3】は、前半はⅠ天女昇天型と同じだが、その結末部分が七つ星の由来になっており、こうした天人女房が沖縄本島には多い。福田晃はこれを「七星女房昇天型」と呼称している。

しかし君島久子は、次のようなモチーフ構成を持つ「七星仙女」が中国福建省南部地域に存在することを指摘する⁽⁴⁾。

- ①仙女が天帝の命、あるいは自分の意志で、貧しい男に嫁す。
- ②子供を生んで去る。
- ③子供は術師、あるいは父の教えで、水浴にきた仙女（母）にあう。
- ④子供は仙女の衣をかくして母と対面するが、仙女は子供に富をあたえて去る。
- ⑤ a 七星の一つが、光のうすいのは、下界に降りて子を生んだためである。

b 仙女の子が、偉人もしくは一族の始祖となる。

これは、羽衣を隠されて昇天できず、やむえず男の妻となったこれまでの天人女房とは異なり、貧しい男を援助するために、天帝の命によって、または自らの意志で降下し妻となる、いわば「押しかけ女房」となっているとこ

⁽⁴⁾ 君島久子「中国の羽衣説話」（福田晃編『昔話の発生と伝播』名著出版、1984年）

ろに特徴がある。君島はこれを「七星始祖型」の羽衣説話とするが、こうした話が日本では奄美・沖縄諸島にまとまって分布することから、「星女房」という新たな話型とみなす動きもある⁵⁾。

次に掲げる「七つ星の女房」は典型的な「星女房」である。これは沖縄諸島・粟国島の仲里秀雄（明治32年生まれ）が「この話は、中国のどこかの話ではないかな」と前置きして語っているが、長いので梗概を記す。

【例話4】

ある老夫婦が居て、おじいさんが八十才、おばあさんが七十才の時に待望の子供が授かった。「こんな年になって神様に恵んでもらった子供は広い中国といえどもいない」ことからトイと名付けられた。おじいさん（父親）が病気になったためトイは奉公に行くことになった。やがておじいさんは亡くなり、しばらくしておばあさん（母親）も病気で亡くなった。両親の医療費や生活費に加えて葬式の費用も重なり、トイの借金は膨らみ、奉公の年期も長くなっていった。

両親が亡くなって何年も経たないある年の大晦日のこと。トイが一人寂しそうにしていたのに気づいた主人はトイに声をかけ訳を尋ねると、「生前は親に孝行してあげようにも十分できなかったので、せめて正月には家に帰ってご馳走でも供えてあげたい」と言ったので、主人はトイに正月二、三日の帰宅を認めた。

⁵⁾ 稲田浩二『日本昔話通観』28〔昔話タイプ・インデックス〕では「星女房」という話型を立て、次のようなモチーフ構成を示している。

- ①七つ星の星の長女が親の葬儀を出しかねている孝子を助けようと天から降りて来て、その嫁になる。
- ②嫁が手伝いに来た妹たちと見事な布を織り上げ、夫はそれを売って借金を払う。
- ③夫が嫁に禁じられた夜空を見て七つ星の一つがないことに気づくと、嫁は子を連れて天に帰る。
- ④嫁は汚れた身だからと上席を譲り、七つ星の二番目に子供の星をしたがえて位置する。

また福田晃は「昔話『星女房』の行方」（『南島説話の研究』所収、法政大学出版局、1992年）の中で、「星女房」伝承事例のモチーフ対照表を提示している。

久しぶりに家に戻ったトーイは、荒れ果てたあばら家の中で、仏壇を掃除し、家の中を片付けていたら、庭のクバの葉がザラザラと音をたて、急に風が吹いてきた。トーイが風の吹く方を振り返ってみると、そこに若い美しい女が立っていた。女は、「旅の者ですが、日が暮れて、宿がありません。一晩だけでも泊めてくれませんか」と言うので、「見ての通りのあばら家で、あなたのような美しい方が泊まれるところではない」と断ったが、「そんなことは気にしません」と言うので泊めることにした。すると女は、次々指示を出し、トーイがそのとおりに行くと、クバの葉を敷き詰めたところが立派な畳に変わったり、たくさんのご馳走もできあがった。おかげでご馳走を仏壇にお供えすることもでき、トーイは「こんな正月は初めてだ」と大変喜んだ。

女に「奉公を止めるように」と言われて、トーイは年頭の挨拶に出かけた折、主人に話すと、主人は絶対に不可能な高級の織物七反を持ってくるようにと、難題を突きつけた。トーイは帰宅しそのことを女に告げると、「そんなに悩むことはありません。私が何とかしますから」と、外に出て天に向かって手を三回たたいた。すると天から六人の天女の姉妹が機織り道具と一緒に下りてきて、一晩のうちに、その高級の織物を仕上げた。トーイはそれを持って主人のところへ行くと、驚いた主人は受け取らない。「これまでお世話になったので、ぜひ受け取って下さい」と言うトーイの強い気持ちに負けて、「それならば」と主人は一反だけ受け取って、残りは持ち帰らせた。

それからトーイは奉公に行くこともなくなり、二人は夫婦になった。二人は何不自由なく幸せに暮らしていたが、何年かたつうちに、女はときどき悲しそうな顔をするようになった。そうしたある日、女はトーイに「私はあなたがお気づきのように人間ではありません。北斗七星の一番上の姉星です。親孝行の人を助けてあげるようにとのお達しを受けて下界に下りてきたのです。その役目も果たし、身重にもなったので、どうしても天に帰らなければなりません」と告げた。トーイは驚いて行かないように願ったが、女は「これから私は天に昇って北斗七星の二番目に座ることになるでしょう。その星

の傍らに小さい星が見えるようになったら、それはあなたの子供だと思って下さい。また七月十五日の晩に雨が降ったら、それは私が泣いていると思って下さい」と言い残して天に昇って行った。

年寄りたちは、北斗七星の二番目の星が孝行息子トイを救うために人間界で過ごしてくれたトイの妻の星で、その星の傍らに見える小さな星がトイと天女の子供の星だと言っているよ。（『粟国島の民話』粟国村教育委員会、1992年）

この民話では、貧しい孝行息子を援助するために天の神様の命を受けて、北斗七星の一番目の星が下界に下りてきて「押しかけ女房」となる。そして役目を終え、富を与えて昇天し、元の北斗七星に戻るが、人間の子種を宿したため一番の座から二番の座に退き、傍らの小さな星は生まれた子供であると語られる。要するに、天からの降下および昇天にあたっては全く羽衣は必要とされていない。また〔難題〕を含むが破局型にはなっていない、タブーとなっていた正体を口にしたからではなく、降下の理由となった所定の役目を終えて昇天する、という点で天人女房とは一線を画している。

(3) 牽牛星（わし座のアルイタイル）と織女星（こと座のベガ）

【例話5】

銘苺^{めかるさとうぬし}里之子という、里の大将がいたそうです。そして、庭に一反ほどの池を作って水を溜めて、鯉などを飼って楽しんでいたそうです。そしてまた、里之子はそこで洗面したり、水を浴びたりしていたそうだよ。そして、その周囲には、檜の木を植えたが、もう大きな檜の木になって、その下で池の中をながめ楽しんでいる間に、美しい娘が、朝早くから来て水浴びをしていたが、いつも、すぐいなくなっているので、

「おかしいな。どこかの娘さんに違いないのに、どうして急に見えなくなる

のかなあ」と見計らっていて、何日か注意深く見ていると、また、来て水浴びしているが、木に登って行って木の上で着替えをし、羽衣を木の上に置いて水浴びをし、また木の上に登って行って、その木を通りこして天へ飛び上がって行ったそうです。それを見てしまったので、その娘が、また、来て水浴びをしている時、隠れて行って木に登り、娘が登って来ないうちに、その着物を盗んで隠したそうです。ほらもう、羽衣が無いことには、娘は天へ登れないから、しかたないので主に、

「不思議なことに、私が天へ登り降りする羽衣が盗まれてしまいましたよ。里之子」と申し上げた。それで、

「ああそうかい。それなら、誰がそんなことをしたんだろう。でも、後で必ずかえってくるよ」と、二、三日、今日明日と、何日も何日もひきとめているうちに、里之子と夫婦になって子供も二人生まれ、その二人の子の姉の方が、

「泣くなよ妹、私たちは大きくなって、母ちゃんの羽衣を着て、飛んで遊びに行くから、泣くなよ妹よ」と唄いながら、妹の子守りをしていたそうです。それで母親はこれを聞いて、

「あれは何と言っているんだろう」と隠れて聞いていて、
「あなたは何という唄を唄って、子守りをしていたのかい」と聞くと、何も言わないので、

「どこに母ちゃんの着物はあるのか」となだめすかしていると、その物置から、実際の物を出して来て、「ほら」と渡した。奥さんは夫に知れないように、自分の羽衣を取って隠しておいてから、夫に、

「私は地上にいて暮らしていけぬ人間、天の人間なので天へ戻りたいので許して下さい」と言って、「そして天から縄を下ろしますので、それをたどって、二人の子供と一緒に貴方も、登ってきて下さいね」と言って、行ってしまったそうです。

「ああそうか、縄で天へ登ることができるのか」と考えて、何月何日に縄を

下ろすと言っていたので、子供二人と準備して待っていると、本当に縄が下りて来たそうですよ。檜の木の下へね。もうそれをたどって天へ登って行くと、奥さんは、「この家の戸口はチャーンと鳴って開き、チャーンと鳴って閉まるので、戸が開くと同時に、さっと入らないと危ないよ」と教えたそうです。それで、まず最初に開いたと同時に、荷物などを中へ入れて、パーンパーンと開閉しているのだが、彼はそのような戸にはさまれることもなく、入ることができた。そうして行くと、その奥さんの父親は天太（太陽のこと）だったらしいよ。天太の島へ入って行くと、またこんなことも教えたそうです。

「貴方が入ってくると、天太が〈ぴいがら〉野菜を植えて来るように言いつけるはずですから、馬に乗り、馬を家の方へ向けて立たせ、その種物を馬の歩く後ろの方へ、グーと蒔いて来なさい」と言ったそう。それで、その種物を蒔いて、馬の一足ごとに蒔いて、そのぴいがら物とは冬瓜だった。ぴいがら物という冬瓜はすぐに生えて来て、馬や自分に巻きつきそうなので、鎌を腰に下げて持っているように教えてあったらしいので、鎌で茎をガスガスと切っては、馬を早く歩かせ歩かせしながら、家へ帰って来たそうです。もう異常もなくね。家へ帰ると、またすぐ、「その冬瓜を取って来なさい」と、その奥さんの父さんが言いつけたので、「ああ、今生えたかどうかの野菜が一日で実がなるのか」と思いながら、「はい」と馬に乗って行くと、驚いたことに、冬瓜の実はたくさん、大きく長く実っているので、それを取って馬に積んで家に帰ると、その一つだけは、奥さんが教えるのを忘れていた。そして、天太が、「それでは、この野菜を割ってごらんなさい」と、「切ってみなさい」と言うので、「はい」と言ったが、大きい冬瓜なので、立てたままでは割れないので、横にしておいた真中から切ったそうだよ。この銘苳子はね。

横たえておいて、真中からブツと切ったその時、冬瓜から出た汁が天の川になって、その川の側には、こちらの方には、きれいな光った星が点々と三

つあり、また光っている星の下には、小さな星が両側にあって、それは銘苺里之子の子供の星らしく、銘苺星と呼ばれ、またもう一方にあるのは、ブナズ星と言うそうですよ。それは、その銘苺子が、羽衣を隠しておいた事が、悪い結果になってしまったんだね。それで、スツップナカ（多良間の豊年祭り）のたった一日だけ、面会を許されるようになったそうですよ。あの川で二人を隔てておいてね。その時だけ許されるという話だよ。（『多良間村の民話』多良間村役場、1981年）

この多良間島の「天人女房」は福田の分類でいうⅢ難題型に属する。男の名前を銘苺里之子とするのは沖縄本島の民話や組踊の「銘苺子」と同じであるが、天女の降下場所が自宅庭となっている点、昇天した天女が縄を下ろし父子が天上で再会する点、天女の父を太陽とする点などに相違が見られる。最も独創的なところは結末部分で、七夕由来に引き寄せながらも、川で隔てられた片方の星を、両側に小さな星を配している銘苺星、もう片方の星をブナズ星と言い、年に一度の再会時期を多良間島の豊年の感謝と祈願の祭りであるスツップナカの日としているところである。スツップナカは旧正月の初または二回目の「癸巳」か「壬辰」に「予算会（手始めの祈願）」が持たれ、次の「癸巳」か「壬辰」が祭日となる。ちなみに最近5年間で言うと、すべて「癸巳」に行われており、早い日で平成25年の5月27日（旧暦4月18日）、遅い日で平成19年6月28日（旧暦5月14日）であるが、いずれも七夕よりは早い。この民話で言う銘苺星は牽牛（わし座のアルイタイル）、ブナズ星は織女（こと座のベガ）であるが、銘苺星は男性の名前から付けられたものであるが、ブナズは女兄弟のブナリの方言名を宛てたものであろう。いずれにしても七夕伝説の牽牛・織女とは逆になっている。

牽牛星と織女星については「天人女房」とは別の由来譚もある。まず宮古島市の「牛を連れた星のお話」を掲げよう。

【例話6】

むかし、牛は野原でつなぎとめ飼っていました。朝は牛を連れ出し、野原でつなぎとめ、夕方になると家へ連れ帰る。このように牛は飼っていました。

ある男の人が、朝早く、牛を連れて野原へ行きました。野原へ着くと、あいにく大雨が激しく降りました。大雨で天の川があふれてしまい、帰ろうにも帰れませんでした。とうとう、その男の人は二度と家へ帰ることはできなくなりました。それで、今では、前と後に牛を引っぱっている星が、天の川へ隔てたところに輝いています。

それでも、旧七月七日の七夕になると、神様が一年に一回、家に帰ることを許すので、この時、天の川を渡って、妻の待っている家に帰ります。妻は家で毎日ブー（苧麻）をつむいで、夫の帰りを待っています。七夕には夫が帰り、三日間は楽しく過ごすのだそうです。

妻は、破れたサスキ（箱）を持っています。それで、妻の星は夫の星とは反対側の、天の川を隔てたところで、四角いサスキの一つの角がとれ、三角の星が輝いています。あれが妻の星だそうです。（『ゆがたい』第4集、宮古民話の会、1984年）

牽牛星は『倭名抄』以来、日本では「いぬかいぼし」と読まれているが、岡山県と熊本県の一部に「うしかいぼし」と呼ぶ地域があるという。宮古島のこの民話は星の名称こそ示されないが、犬ではなく牛を連れているので、そのように認識していたことは間違いない。牽牛星すなわち日本でいう「ひこ星」はわし座のアルタイルのことであるが、この民話では、一等星のアルタイルを牛飼い男、その両側に一直線に並ぶ三等星と四等星を引き連れている牛に見立てている。また妻がブー（苧麻）を績んでいることから「おりひめ」と推定できよう。サスキ（箱）はブー（苧麻）を績んだ糸を入れる箱のことである。ただしサスキの一つの角がとれて三角形になっていると語

る。これはこと座の一等星ベガの近くに斜め長方形をした星があり、その中の一つは他と比べてやや光が弱いので一角が欠けた三角形に見えたのであろうか。

この民話は、夫が牛を連れて野原へ出かけた日に大雨が降って川（天の川）が溢れて帰れなくなり、神様の計らいで年に一回、旧七月七日の七夕の日に三日間だけ帰宅を許されるという筋書きである。大雨による川の氾濫が理由で帰れなくなったことと、年に一回三日間だけ帰宅を許されるという関係があいまいで、話としては十分整っていないが、牽牛星と織女星を天人女房と結びつけて語っているところに特徴がある。

一方で、牽牛星と織女星をビギリ（兄弟）とブナリ（姉妹）の関係で捉える話もある。立命館大学・大谷女子大学・沖縄国際大学三大学合同による昭和52年の民話調査において、石垣市真栄里の浦浜清松（明治38年生まれ）は「天の川の話」として次のように語っている。

【例話7】

昔、ある家に、男と女の兄弟がいたそうだ。〈男の兄弟をビギリ、女の兄弟をブナリと言った〉ブナリは、ブー（苧麻）を績む時は夢中になり、毎日、毎日、ブーを績んではスクイの中に入れていた。〈績んだブーを入れる小さな四角い箱をスクイと言った〉

ある日、畑仕事もせずブーだけ績んでいるブナリに対して、ビギリは腹を立て、通路に置かれていたスクイを蹴っ飛ばした。そしたらブナリは怒って家を出て行ってしまった。スクイを持って出て行ったブナリは、川を越え向こう岸までたどり着いた。

ビギリはブナリの後を追い、牛を連れて、馬に乗り、川辺まで行き、川を渡ろうとすると急に川の水が増し、渡ることができずにいたそうだ。

こうしてブナリはスクイを持って川の向こう岸に居て、ビギリは牛を連れ、馬に乗って反対の岸に居て、そのまま星となって天の川の兩岸に位置

するようになった。なぜブナリは川を渡れて、ビキリが渡ろうとすると水かさが増したかと言うと、神様が、ブナリ神は（靈威が）高いのでこれを保護し、ビキリの方は川を越えさせないようにしたという話だよ。（立命館大学・大谷女子大学・沖縄国際大学三大学合同民話調査テープより）

これと同じ年に、大川の塩谷貞（明治30年生まれ）からも類話が聴取されているが、別途、沖縄民話の会も、白保の多字時（明治43年生まれ）から次のような「天の川由来」を聴取している。

【例話8】

兄と弟がおっいたらしいですよ。それで、妹が芭蕉をつむいでおるときに、仲が悪い兄がつむいだ糸を入れた箱を蹴っ飛ばしたらしいですね。

ある日、兄が牛と馬を引っ張って行く時に川があってねえ、川を渡ろうとすると、蹴飛ばした糸の糸が引っ掛かって渡れなくなったそうですよ。それで、兄は牛と馬を引っ張ったまま川を渡れないでいると、そのまま天の川の一つは牛星、一つは馬星、もう一つは兄の星になった。だから、天の川の岸に妹の星があって、天の川には星が三つあるですよ。

女の兄弟をぶなりの神と言いますが、
「ぶなりの神は高いから、ぶなりを足で蹴ったりしないで崇めなさいよ」とそんな話を親からよく聞いたんです。（『聴く・語る・創る』第十号「特集 石垣島の民話」日本民話の会、2003年）

沖縄にはブナリ（姉妹）の靈威がビギリ（兄弟）を守護するという「オナリ神信仰」がある。兄弟が船旅に出る時、姉妹は旅の安全のお守りとして自ら織ったティーサジ（手拭い）を持たせた。竹富島の上勢頭亨（明治43年生まれ）は「^{ぶなりがん}妹神と^{まわいていーさじ}守り手拭いの話」として次のような伝承を語っている。

昔、竹富島に二人の兄妹がいた。兄が役人のお供をして遠い旅に出かけ

ることになったため、心を込めて織った手拭いを渡した。旅に出てある日のこと、兄は山から水を汲んで帰る途中、三人の悪者から「お前はここから私たちの許しもなく水を汲んできたな」と言いがかりをつけられ、斬り殺されそうになるが、兄は妹からもらった手拭いを水桶の水に浸して、それを振り回して悪者の刀をからみとって難を逃れた。それから姉妹の手拭いがお守りとして用いられるようになった（上勢頭亨『竹富島誌 民話・民俗篇』法政大学出版局、1976年）。

航海以外にも、例えば出征の際に姉妹が千人針を用意し、白布に毛髪を入れた包みを渡されたという話も聞かれる。こうしたオナリ神の靈威を信じ、兄弟は姉妹に対して粗暴な行為はしてはならないと家庭内では躰けられたという⁶⁾。【例話7】【例話8】では、ビキリがブナリに対して暴言を吐き、ブナリが大事にしている道具を蹴り飛ばすという悪行を働いたため、ブナリは川を渡って向こう岸に行けたが、ビキリは川を渡ることができずに牛馬とともに川辺に取り残されることになったという。なおビキリが川を渡れなかったことについて、【例話7】は天の神様の懲罰とし、【例話8】はスクイを蹴っ飛ばした際に糸が足にからんだためと説明している。

(4) ハイガ星（ケンタウルス座の α 星と β 星）

【例話9】

昔、乳房がね、乳房が三つある母親がいた。そして（彼女には）子どもが二人いたそうだ。そういうことで、乳房が三つある母親（のこと）は、いわば今の知事だが、その頃は殿様（王様）がいらっしゃって、その耳にも入ったそうだ。それで、今度は、殿様から呼び出しを受けることになったので、子どもたちへの遺言として、

「実は、自分（お母さん）は、普通の人と違って、三つの乳房があるという

⁶⁾ 馬淵東一「沖繩先島のオナリ神(一)(二)」(『日本民俗学』第2巻第4号、第3巻第1号)

ことで、殿様から呼び出されてしまったので、再び帰って来れるか、来れないかわからないので、南が星という星になって現れるから、それを目当てに農業していきなさいよ」と言い残して、出て行ったそうだ。行ってしまったので、子供たちは、

「今年は帰って来るだろうか、来年こそ来るだろうか」と待ちこがれていたが、この母親は帰ってこなかったそうだ。それで、この子供たちは、

「私たちのお母さんは、一年たっても、二年たっても戻ってこないで、（言われたように）今度こそ目印を見てみよう」と言って、見てみると、実際に、南が星というものが、朝も晩も現れていた。子供たちは、

「あー、もう私たちのお母さんは戻ってこないんだな」ということで、二人の子供は、早朝と夕方に出る星を目印に農業し、生活をしていったという昔話がある。（『大浜の民話2』石垣市教育委員会、2013年）

八重山地方においてのみ聴取される民話であるが、石垣市真栄里では母親の乳房は四つあったと語られる。いずれにしても乳房が普通の人より多かったがために女性（母親）が琉球国王の命令によって子供と引き裂かれるが、その後、母親はハイガ星となり、残された子供たちに農業の時期を教えるというもの。

ハイガ星とは、ケンタウルス座の α 星と β 星のことである。八重山ではこの二つの星が、夕方の南の空で水平に並ぶ季節が稲刈りの時期で、明け方の南の空で水平に並ぶ季節が田植えの時期とされた。

なお黒島には「南風が星」というユングトラがあるが、そこでは二つの星を他界した両親とみなしている。しかし民話では母親一人が星になっている。恐らく、ケンタウルスが南中すると二つの星は横並びになるところが母親の乳首のように見えることからこの話が生まれたのであろう。

ところで、「ニヌファ星の由来」では、天帝が下界の人間を天に引き上げて星にしているが、ここでは、母親が子供たちへの遺言を実現するために自

らの意志でハイガ星になっている。

同じハイガ星の由来譚でも農業とは関係がない民話もある。石垣市平得の白金ヒデ（明治31年生まれ）が語る「ハイガ星の由来」を掲げよう。

【例話10】

ある夫婦がいて子供もいた。その女には乳房が四つあった。その村の橋はどんなに直しても少しの雨で壊れてしまった。その年もその橋は壊れたので、役人達は橋の所でどうすればもっと強い橋が造れるか話していた。ある日、その女房の方が役人達に、乳が四つある女を探して殺して埋めれば、きっと強い橋ができることを教える。役人達は夢中でそのような女性を探す。探し出された女は、そのことを教えてあった女房であった。女房は自分の口が災いしたが、「私が死んだら南の方へ二つの星を出すので私だと思って下さい」と言って死んでしまう。夫と残された子供は一緒に浜辺へ出て星をながめながら泣き、「口先だった人は災いが起こる」と言った。（禱晴一郎「沖縄の天体説話」『沖縄民話の会会報』8）

これは「真玉橋の人柱」の八重山版とでもいうべき類話である。「真玉橋の人柱」の梗概は次の通りである。国場川に架かる真玉橋が木橋であった頃、何度橋を架けても大水で流されてしまうため、ある女が「子年生まれの七色ムーティー（元結い）した女を埋めると橋は完成する」と言う。役人はそういう人をいくら探したが見つからず、結局、そのことを言い出した女がそうだとわかり人柱として埋められることになる。女は娘に「人より先に物を言うな」と遺言したため娘は口をきかなくなる。しかし娘が男に見染められた時、母親が蝶となって飛んできて娘に物を言わせたため、その後幸福になる。

平得の民話の前半部分はこれとほぼ同じだが、後半では、母親が自らハイガ星となることを言い残して死に、残された夫と子供はハイガ星を見ながら

「口先だった人は災いが起こる」ことを悟る内容になっている。「真玉橋の人柱」の類話は沖縄本島各地にあるが⁷⁾、人柱になった女がハイガ星になって現れるというのは本話のみである。

黒島からは二種類のハイガ星に関する民話が聴取されている。

【例話11】

昔、黒島で部落は不明、乳の四つある女の子が生まれた。其の子はすくすく育ち、程々に成長し夫婦の縁組もされ、お嫁に行き暮らすうちに男の子が生まれたので非常に喜び、大切に育てていた。琉球王府で王様が病気になり、鍼灸師や医者の方々診断の結果、王様の病気の薬は乳の四つある女の生肝臓をあげないと病気は治らないとの事で、沖縄の島々、宮古、八重山の各離島を調べるうちに、八重山の黒島に五才になる男の子を一人生んだ女をみつけた。係の役人は犬猫を捕むように連れ去ろうとすると、

「私には五才になる男の子がおりますから許して下さい」と願った。係役は、「王様の命令だから許すことはできない」。親子三名は抱き合っていたが、女は、「上からの命令だから仕方なく捕らわれて行くが、万一殺されたら印に午の方位に大きな星を出して見せる」と遺言し、抱き合っている親子を係官は引き裂くように連れ去った。

残る親子は毎日泣き暮らしているうちに、遺言通り星が現れた。父親は苦しみの果て病気にかかり亡くなった。残された子は自力で程々に成長して畑仕事に行き、雨が降ったので雨宿りで誦ったのがハイガ星の謡とさ。(幸地厚吉『さふじま』私家版、1987年)

幸地厚吉(明治36年生まれ)が祖母マカト(嘉永元年生まれ)から聞いたというこの話は、「猿の生き肝」との混交が見られるが、殺されたら午

⁷⁾ 日本の人柱に関する民話については、桑原律「悲運の犠牲者たち - 『人柱民話』をめぐって - 」（『民話のいのち』白石書店、1991年）を参照。

（南）の方角に大きな星を出現させるとの遺言通り、南方にハイガ星が現れるというものである。もう一つは、高那真牛（明治24年生まれ）が語る次のような伝承である（禱晴一郎「沖縄の天体説話」）。①宮里部落に乳房が三つある女がいて二人の子供を生む。②「乳房が三つある女は人間ではないから油を取って送れ」という琉球の王様の命令を受けて、役人はその女を大鍋に入れて油を取って送る。③やがて女の子は死に、残された男の子は畑仕事をしながら「ハイガ星」を謡う。

これら黒島の二つの民話はいずれも結末は古謡につなげている。黒島には「南風が星」というユングトゥ（古謡の一種）が二つある。その一つは、幼少の頃に両親に死に別れたキドンナ（女性カ）が、体も大きくなって仕事場に出ていると、雨が降ったので、ススキの元に行き、そこで、父親が生きていたら、母親が生きていたら、あるいは祖父でも叔父でもいたらと、いろいろ思いをめぐらしているうちに、雨もあがり、太陽も沈んだので、ススキの元から出て南方の空を見ると大星^{うほんほし}が二つあった。これが私の両親だと思い、そこへ行ったそうだ、という内容である（『南島歌謡大成 IV八重山篇』150頁）。古謡には母親が死んだ理由は見えないが、民話では琉球国王の強権によって残忍な方法で殺されたことになっている。

（5）さそり座のアンタレス

【例話12】

むかし、波照間島に酒好きな老人がいました。ある夜、一人で天の川に釣りに出かけましたが、釣り道具とともに好きなお酒を携えることも忘れませんでした。老人は天の川の川べりにどっかと腰を下ろして釣り糸を垂れ、釣りを楽しみながら持参のひさごを取り出してちびりちびりとお酒を飲んでいました。飲むうちに酔っ払ってしまい、顔は真っ赤になっています。けれど川風に吹かれて、とてもよい気持ちなのです。老人はなおもお酒を飲み続け

ました。そして遂に酔いつぶれてしまい、川べりに寝込んでしまいました
が、姿は変わってそのまま星になってしまったということです。夏の夜空の
天の川近くに赤い星が見えるのがその酒好きなおじいさんの星だそうです。

(『老いて学べば - 竹原孫恭遺稿集 -』私家版、1984年)

『おもろさうし』巻十-534に「あけ 上がる赤星や あけ 神ぎゃ金細
矢」と見え、宮古の「狩俣祖神のニーリ」にも「ていんぬ あかぶしゃよ
(天の赤星よ)」と見える「あかぶし(赤星)」は金星(宵の明星)と解さ
れている。しかしこの民話では天の川の近くにある星ということなので、金
星ではなく、さそり座のアンタレスと思われる。さそりの尻尾の部分が釣り
針に似ていて、それが天の川にかかって見えることからこうした民話が生ま
れたのであろう。

野尻抱影『日本の星名辞典』によれば、さそり座のS字形の部分をつり針
に見なし、日本では奄美・沖縄諸島や瀬戸内海に面した地域、外国では太平
洋のポリネシア諸島や台湾では、さそり座に「魚釣り星」という星名が付け
られているという。また赤い色を収穫の秋と結びつけ「豊年星」と呼ぶ地域
もあるが、酒に酔った赤ら顔という意味で「酒酔い星」と呼ぶ大分県や山口
県の事例はこの黒島の民話に通ずるところがある。

(6) 明けの明星

【例話13】

むかし、大浦には、ニシャグ^{とうゆみうや}豊見親とマイティ豊見親という二人の豊見親
がいました。その頃、二人の豊見親は、毎日戦さばかりやっていました。

ある時の戦さで、マイティ豊見親は陣地内にはわら人形を立てて置き、ニ
シャグ豊見親の陣地の後ろに廻って急襲しました。マイティ豊見親は策略で
勝って、ニシャグ豊見親を滅ぼしてしまいました。その時から、大浦は、マ

イティ豊見親が支配するようになりました。

ある日、マイティ豊見親のところに、沖縄の偉い御主^{うしゅう}から呼び出しがかかり、「沖縄に來い」との連絡がありました。それで、マイティ豊見親は、家來たちを集めて、

「私はこれから沖縄へ行くが、あるいは帰れないかも知れない。もし私が帰れない時は、明け方の星となって帰って来よう。東の空に明け方の星が出たら、私と思ってくれ」と言い残して、数名の家來を連れて、沖縄へ出発していきました。

とうとう、マイティ豊見親は宮古に帰りませんでした。そのあと、明け方になると大きな星が東の空に現れるようになりました。それで大浦の人々は、「あれはマイティ豊見親だ。ウプラウサギだ」と言って、拝むようになりました。

その星は一番遅く現れる（ママ）星なので、それ以来、たとえ話の中に、集まりなどで長座する人を、ウプラウサギとも言うようになりました。（『ゆがたい』第4集、宮古民話の会、1984年）

これは宮古島市に伝わる民話で、大浦（ウプラ）の指導者すなわちマイティ豊見親が琉球王府に呼び出されて帰れずにウプラウサギになったというもの。ウプラは大浦、ウサギはウサギル（捧げる）の意味で、ここではマイティ豊見親の固有名詞として用いられている。さらに本話では、明けの明星が太陽の上がる頃まで見えることから、集まりの時などで長時間居残る人の例えとしても用いられるという尾ひれまでついている。

ところで多良間島に残された『星見様』にはウプラ星という星名が見え、いまのところこの星は「ふたご座」の α 星・ β 星に同定されている⁽⁸⁾。

「与那覇勢頭豊見親ニ一リ」に謡われている「うぶらくーら」という星名の

⁽⁸⁾ 高城隆・星加弘文「『星見様』の研究 - 沖縄・多良間島の星伝承 - (上) (下)」(『沖縄文化』53・54)、黒島為一「古歌謡のなかの星②」(『八重山毎日新聞』1987年8月2日付)

「くーら」の語意は判然としないが、稲村賢敷は「ウブラウサギ」と同じで「明けの明星」と解し⁹⁾、黒島為一は「ウブラ星」と同じで「ふたご座」の α 星・ β 星と解している¹⁰⁾。しかし「ウブラウサギ」という言葉が集会などの時に長尻する人に対しても用いられるということからすれば、明けの明星こそが最もふさわしい¹¹⁾。

次の、読谷村大木の宮城ヤス（明治44年生まれ）が語る明けの明星の由来譚はやや異色である。意識して揚げよう。

【例話14】

親孝行の姉妹二人が水汲みに行ったら天の川が満ちて渡れなかったそうだ。それで二人の姉妹は「どうしよう」と川辺で立ちすくんでいると、この二人は大変な親孝行だったので、川の水が西と東の両側に引き、姉妹は渡ることができた。その二人の姉妹はヨーカブシになったという話をお父さんから聞いた。（読谷村民話資料集13『大木・牧原・長田の民話』読谷村教育委員会、1996年）

ヨーカブシは明けの明星の方言名である¹²⁾。【例話8】では、天の川を姉妹が渡ることができたのは、天帝がブナリ神として保護したからと語られるが、ここでは親孝行であったからという説明になっている。また渡る方法として、川の水が東西に引いて道ができたとあるのは『旧約聖書』出エジプト記に見える「海が割れる」描写と似ていて興味深い。しかし問題は二人の姉妹がヨーカブシ（明けの明星）となったという点である。

柳田国男は「竹取翁」（『昔話と文学』、『定本柳田国男集』第6巻所収）の中で、奄美大島宇検村（旧焼内村）の「二個の夜明け星」の由来を

⁹⁾ 稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』（至言社、1977年）400頁。

¹⁰⁾ 黒島為一前掲注（8）論文。

¹¹⁾ 宮良当社編『探訪南島語彙稿』（私家版、1926年、後に『宮良当社全集7』所収、第一書房、1980年）でも、明けの明星の宮古方言をウブラウサギとしている。

¹²⁾ 宮良当社編『探訪南島語彙稿』（注（11）に同じ）

語った話を紹介している。『日本昔話通観』第25巻「鹿児島」では、「むかし語り」の「天人女房 - 星由来型」として次のような梗概を載せている。

池のほとりに翁が住み、クロという犬を飼っていた。ある夜音楽の音に誘われて池の岸へやって来ると、松の枝に飛衣がかかっているのを持ち帰る。池で水浴していた天女は飛衣を取られて悲しみ、翁の家に来てたばこを求める。翁は天女をそのまま妻とし、三人の子を生ませる。ある日天女は、二番目の子が末の子の守をして、「泣くな泣くな、泣かぬなら粟倉を開けて、飛衣を出して与えよう」と歌うのを聞いて飛衣を見つけ、それを着て二番目の子を頭にのせて天へ昇る。末の子は重いので残す。翁は急いでぞうり千足をこしらえようとするが、九百九十九足しかない。クロが「ぞうりの代わりになる」と言うので、クロとそのぞうりに乗って天へ昇る。翁は一番の夜明け星に、クロは二番の夜明け星になった。

ここでは、翁とその飼い犬クロが、それぞれ夜明け星になっているが、一番目の夜明け星が金星で、二番目の夜明け星は、その後に出る恒星のことであろう。こうしたことから考えると、読谷村の民話で二人の姉妹がヨーカブシ（明けの明星）になったというのは、明け方の東の空に金星とその前後に現れる恒星を姉妹の星と見たてたのであろうか。

二 運命譚

(1) 子供の寿命

【例話15】

八月にはね、トーカチ（米寿）祝いをするでしょう。これは、どのような理由でトーカチ祝をするのか分かるかな。

これはね、あるところに母娘がおってね。娘に早起きをさせてカー（井）

に水汲みに行かせたら、神様の使者が髭も長くはやして、杖もついておられる人が通るところに、娘は水を汲みにいったからね、その人がご覧になられて、

「もったいない子だね」とおっしゃったらしい。立ち止まって何度も、
「もったいない子だね、本当に」と言ったわけ。

それで、その子は聞きとめて、水は汲んで担いで行って、母親に、
「ねえ、アンマー（お母さん）、髭をはやして杖をついた人が私を見て、『もったいない子だね。本当に』とかなんとか繰り返しておっしゃっていたが、なんでかね」と親に聞いたらしいさ。親も分からないでしょう。

「そうだったの。それなら私が行って、その人からどういうことなのか、理由を聞いてこよう」と言って、その人のあとを追いかけていき、正座をして、

「あなた様ですか、私の子に『もったいない子なんだけどね』とおっしゃられたというのは」とたずねた。

「私だよ」

「なぜ、どんな理由でそうおっしゃいましたか」と聞いたらね、

「おまえの子は、十八才までの寿命しか与えられていないよ」とおっしゃったって。

「もう、十八才になる今年までだよ」と言ったわけさ。そうしたら、もう、
「うちの子には徳があったからこそ、あなた様に見られたのだから、どうか、うちの子の命を助けて下さい」と親が願ったところ、

「私は使用人であって、私には命を助けることはできないが。それだったら、ニヌファのミフシとンヌファのミフシがどこそこで碁を打っておられるので、^{しろいのしし}白猪を捕ってきて、その肉で刺し身を和えて持って行ってね、その方たちが、碁を打っている二人の間においてね、おまえは知らんふりをしてそばにいておきなさい」と教えてくれた。

そうしたら、碁を打ち終わったら、その人たちは、

「おまえのもてなしなのか」とお互いに言い合い、召し上がっている間は、ニヌファのミフシはシヌファのもてなしであると思い、シヌファのミフシはニヌファのもてなしであると思って、なんとも言わずに召し上がったらしい。

そうしたら、終わってから、お互いが、

「おまえのもてなしなのか」

「おまえのもてなしなのか」と言って、

「私はもてなししていない」

「おまえのもてなしだろう」

「いや、私ではない」と言い合っている途中で、親が出ていき、

「これは私のもてなしでございます」と申し上げた。

「おまえはどういう理由で、そこに刺し身を持ってきたのか」と聞いたから、「何月の何日に、うちの子が水を汲みにいったときに、しかじかの風貌をしている方が、うちの子に『もったいない子だね』とおっしゃられたそうで、私は子どもの話を聞いて、その方からお話をお伺いして、このように参っております。その方は子ども命は『十八の寿命であるよ』と言っておられるので、どうぞ、あなた方で福を与えて下さい」と言って、親が願ったわけ。その人たちは人のもてなしを召し上がったので、嫌とは言えないでしょう。すでに召し上がってしまったのだから。そこで、二人は相談してね、

「人のもてなしを食べたからには、嫌とは言えないから、十八に七十をくっつけて、八十八の歳までとしようね」と言って、それで、この人は八十八までも長生きされたいよ。十八で亡くなるはずだった人が。こうして、十八で亡くなるはずだったが、八十八までの命を与えられたので、大きなお祝いをすると言って、八十八の祝いはそれから始まったって。これはうちのおじいさんが、詳しく最後まで話を聞かせてくれたさ。（『具志川市史』民俗編下〔昔話〕、2000年）

数え年が88歳になると、沖縄では旧暦8月8日に米寿（沖縄ではトーチカ〈斗搔き〉と言う）の祝いを行う風習がある。この民話はこの米寿の祝いの由来譚であるが、モチーフ構成は次のようになっている。

- ①十八歳までしか生きられないと言われたという娘の母親が、それを言った老人を探し当て、北の星の神と南の星の神が囲碁を打っているのので、黙ってご馳走をもてなして、お願いするよう教えられる。
- ②母親は言われた通りのことを行い、お願いする。
- ③北と南の星の神は、もてなしを受けた見返りに寿命を記した帳簿の「十八」に七十をくっつけて八十八と書き替える。
- ④八十八の米寿の祝いはそこから始まる。

この話は韓国や日本全土にもあり、稲田浩二『日本昔話通観』28〔昔話タイプ・インデックス〕では「運定め」という話型で「子供の寿命」というサブタイプをあてている。奄美にもあるが、沖縄諸島では、具志川以外にも国頭村・伊江村・伊是名村・大宜味村・名護市・うるま市石川・宜野座村・本部町・恩納村・読谷村・嘉手納町・北中城村・中城村・西原町・南城市東風平・粟国村・渡嘉敷村等で聴取され、宮古諸島では下地・上野・多良間・伊良部で聴取されているが、八重山地方では今のところ聴取例はない。

この話は、中国の東晋時代に干宝が著した『搜神記』巻3に見える。

^{かんろ}管輅が平原（山東省）を通りかかったとき、^{がんちよう}顔超という少年の人相を見て、若死にの相があらわれていると判断した。すると顔の父親が寿命をのばしてほしいとたのんだので、輅は答えた。

「家に帰って、清酒一樽と、鹿の乾肉一斤とを買っておきなさい。卯の日に、麦の刈りあとの南側の大きな桑の木の陰で、二人の男が碁を打っているはずだ。そこへ行って酒をついでやり、乾肉を出しなさい。飲んでしまったらまたついでやり、ぜんぶなくなるまで続けるのだ。もし何か尋ねたら、ただ頭を下げていればよい。口をきいてはいかんぞ。そうすれば、きっと誰かがお前を助けてくれるだろう」

顔が言われたとおりに行ってみると、果たして二人の男が碁を打っている。顔は乾肉をさし出し、酒をついでやった。二人は勝負に夢中になっていて、盃を口にはこび、乾肉をつまむばかりで、顔の方は見向きもしない。飲みほしてはまたついでやり、何度かくりかえしているうちに、北側に坐っていた男が、ふと顔がいるのに気づいて、叱りつけた。

「なぜここにいるんだ？」

顔が頭を下げればかりいると、南側に坐っている男が口を出した。

「さっきからこの若者の酒を飲んでいたとあっては、返礼なしにはすむまいなあ」

すると北側の男は、

「しかし閻魔帳がもう決まっているんだ」

と言ったが、南側の男は、

「ちょっと閻魔帳を見せてごらん」

と、帳簿を手にとって見ると、顔の寿命は十九歳までとなっている。男は筆をとって上下顛倒のしるしをつけ、

「お前の寿命をのばして九十まで生きられるようにしてやったぞ」

と言った。顔は頭を下げ、家に帰った。

あとで轆は、顔にこう説明した。

「君の力になれたなあ。まあ、寿命がのびてけこうだ。じつは、北側に坐っていた男が北斗星で、南側に坐っていた男が南斗星だったのだ。南斗星は生をつかさどり、北斗星は死をつかさどるものでな。人間はすべて、母の胎内に宿ってからは、南斗星から北斗星の方へ進んで行くのだ。だからいっさいの願い事は、みな北斗星にお願いするのさ」（干宝著・竹田晃訳『搜神記』平凡社、2000年）。

北斗真君（北斗七星が神格化したもの）は死をつかさどる神であり、南斗真君（南斗六星が神格化したもの）は生をつかさどる神で、いずれも道教の

神であるが、これらの神々は天界と下界を自由に行き来できると考えられていたようである。

沖縄の民話では、北斗真君を「北の星の神」、南斗真君を「南の星の神」とするが、それぞれ死と生をつかさどる神であるという説明はない。ただ碁を打っている二人の神に寿命の引き延ばしをお願いしている。しかし決められた寿命は「十九」でなく、「十八」としている。また寿命の引き延ばす方法として、【例話15】の具志川市宇堅の事例では十八に七十をくっつけると語っているが、他では「十八」の十の前に八の数字を付け加えて八十八としている場合が多い。九十歳は「卒寿」であるが、中国の説話では特に長寿祝いと結びつけることはない。しかし沖縄ではこれを八十八歳の米寿の由来として語られるところに特徴がある。

米寿祝いは八重山ではユニドゥシヌヨイ（米年の祝い）といい、床の間に、ガイジバラーという大きな穀物入れに二十八光の饗立^{こうだてい}をめぐらし、8升8合の白米を盛り、切り口を赤く染めた竹の斗搔き（枡に盛った米を平らにする竹棒）を8本立てて、1升枡、5合枡、1合枡を重ね、紅白の紙に「寿」の字を書いてガイジバラーおよび枡に貼り付けた花米一飾りを据える（宮城文『八重山生活誌』426頁）。そしてお祝いに来た人々に斗搔きを配る。なお沖縄本島や周辺離島および宮古島では、前の晩に、死に装束を着せて頭にタオルを被せ、手を組ませて西枕にして寝かせ、枕元には香炉を置いて線香を焚き、枕飯を供えるしきたりがあったという⁴³。

「子供の寿命」で特異なものは宮古島市上野字野原（旧上野村）の平良マツメガ（明治34年生まれ）が語る伝承である。それは、十二の方位から神々が野原岳の霊石のところに集まって、碁を打ったり人々の運命を決めたりするところへ、母親がご馳走を持って行って霊石の上に置き、それを食べた

⁴³ こうした模擬葬式については、源武雄が『沖縄県史 22 民俗1』（琉球政府、1972年）で報告している。最近では、古家信平「年祝いにみる擬死と再生」（古家信平・小熊誠・萩原左人『日本の民俗 12 南島の暮らし』吉川弘文館、2009年）がこの問題を取り上げている。

神々に、7歳までしか生きられないと言われた子供の寿命を77歳まで延ばしてもらったというものである（『上野村誌（創立30周年版）』上野村役場、1978年）。その霊石は、昭和22年頃に野原岳からタマラザ御嶽に移され現在も残っている。

（2）星願い

【例話16】

昔、ある村に一人の女がいて結婚し、男の子を一人もうけました。子供は風邪ひとつひかず、すくすくと丈夫に育ちましたが、三才のころから急に身体が弱くなり、風邪をひいたり、おなかをこわしたりでやせ細りました。

村の人たちに教えてもらって、せんじ薬をやったり、虫下しの薬を飲んだりで、いろいろ手当をしましたが、一向に効きめはありません。心配して三世相むねんしにみせたところ、

「この子は寿命がつきている。あと幾日も経たずに死ぬであろう。人間は、人それぞれに持って生まれた星運勢ほしうんせいがあり、その運勢によって寿命は決められている。まことにお気の毒だが、この子の寿命はこれだけしかない。いかなる名医のお薬も効かないであろう」とのことです。

びっくりした女は、

「それは大変、こんなに可愛く生まれ、近ごろはいろいろなことも覚え、たいへん利口になりました。何とか寿命を伸ばすことは出来ないでしょうか」と尋ねますと、三世相は、

「それはむづかしい。しかし、そのままほっておいて見殺しにすることも出来ずまい。お餅あらいばなや洗米まーす・塩ぐし・酒ちやどう・茶湯いきばな・生花などの供物を供え、燈明をともして、星運勢を預かる神様にお願いしてごらん下さい。お聞き下さるかも知れないから」とのことです。

女は早速三世相に教えられた通り、お座敷に机を持ち出し、お餅や洗米な

どの供物を取り揃えて供え、燈明をともし、

「何とぞ子供の寿命を伸ばし、長命をさせて下さるように」と、星運勢の神様に祈りました。すると神様は、

「この子の寿命はやがて尽きることになっている。運勢で決まったものを、勝手に伸ばすわけにはいかない。しかし、母親のお前が、こんなに熱心に祈っているのに、そのまま見捨てるわけにもいきまい。親の真心にこたえて、もう一年伸ばしてやることにし、後のことはその時になって考えることにしよう」と、おっしゃって、一年だけ寿命を伸ばして下さることを約束して下さいました。

日ならずして子供の病気はよくなり、食事も進んで元気を取りもどし、骨と皮のようにやせ細っていた子供はみるみる肥りました。

ところが、年があけると又食事が進まず、色青ざめて元気を失ってきました。女は、

「そうだ。星運勢の神様は一年だけ寿命を伸ばすことを約束して、その後のことはその時になって考えようとおっしゃった。決して見捨てられた訳ではない。いっしょう懸命お願いすれば、きっと長命を与えて下さるに違いない」と考え、日を選んで又『星運勢願事』をしたところ、今度も又、「一年を限って命を伸ばしてやろう」と、仰せになりました。

こうして、翌年も翌年も、一年しか約束して下さいません。神様は決して一年以上はお聞き届け下さらない事が分かったので、それから毎年『星運勢の願事』を続けていましたら、この人はいつも元気で、とうとう米寿まで長命したということがあります。

島の人たちはこれを見て、『星運勢の願事』の大事なことがわかり、これに倣って長命をあやかりようと、どの家でも『星運勢の願事』をするようになったということがあります。（竹原孫恭『ばがー島八重山の民話』私家版、1978年）

黒島の神山とみ（大正8年生まれ）によって伝承されたこの民話は「子供の寿命」の話型に属するが、人は生まれながらにして自身の星が定まっています、その星によって寿命が支配されているとして、毎年、自分の星に延命を願えば88歳まで生きることができるという「星願い」信仰の由来譚となっている。88歳までという最終寿命が示されているのは「子供の寿命」と同じであるが、この話は米寿の由来としては語られない。

次の「鉄門の福分^{かにじょう}」も、星が人間の運命と関わる話である。

（3）鉄門の福分

【例話17】

昔あるところに、子供のいない働き者の夫婦がいた。食べる分には不自由しないが、どんなに働いてもお金が貯まらない。そこで夫婦は、よその村の金持ちの家を訪ねて、どうしてお金持ちになったのかを聞くことにした。ある村に行くと、立派な家があり、そこに一人の白髪の生えたタンメー（爺さん）が立派な机の前に座っていた。夫婦はそのタンメーに会って話を聞くことにした。家の中に入るとたくさんの星が描かれていたので、輝いている星とそうでない星の意味について老人に尋ねた。すると老人は、

「人は天の星を授かって生まれる。普通の人はいたい同じように輝いているが、大きく輝いている星は福分の大きな人で、福分のない人はホテルと同じようにほんのわずかに小さく見える星だ」と答え、さらに、ひときわ大きく輝いている星は、二、三十年後に生まれてくるカニジョーマンという人のものであると教える。

夫婦は、カニジョーマンが生まれるまでの間、その星の運を貸してくれるように頼み、その人が生まれてきたら必ず返すことを約束して借りることになった。するとたちまち大金持ちとなり、鉄で作った門のある立派な家を建てて住むようになる。

それから二十年も経ったある日、乞食の女がその鉄の門の下で赤子を生み、カニジョーマンという名前をつけた。そのことを門番から知らされた夫婦は、母親と赤子を家に招き入れ、カニジョーマンを自分たちの子どもとして育て、母親にも部屋をあてがって一緒に暮らすことにした。大事に育てられたカニジョーマンは、成長して大金持ちになり、夫婦も、カニジョーマンの親として、その後も金持ちのまま過ごした。（『本部町の民話』上巻・昔話編、本部町教育委員会、2004年）

これは本部町^{けんけん}健堅の照屋松吉（明治32年生まれ）が語る「鉄門の福分」の梗概である。鉄の門の下で生まれたことから名付けられた子供の名前については、カニジョー、ジョウグチカニー、ジョースタルガニーなど地域によって異なるが、働けども決して金持ちにはなれない夫婦が、まだ生まれてこない子供の福分を借りて金持ちになるという話は、沖縄本島各地および周辺離島、また八重山の西表島からも聴取されている。

中国の『搜神記』巻10にも次のような似た話が載っている。

貧乏夫婦の夫が天帝の計らいによって、金運のある人のお金を、生まれるまでの間、借りることになったという夢を見る。目を醒まして一層精を出して働いたら夢で借りた額の蓄えができた。ところが家の女中がどこかの男と密通して妊娠したため家を追い出したところ車庫の軒下で出産する。その子供に名付けられた名前が奇しくも夢の中で福分のある子供と一緒にだったので、夫婦の財産は日に日に減少して行き、代わりにその子供は成長して金持ちになった。

従って「鉄門の福分」の民話は、中国から沖縄に伝えられたものであることは間違いない。しかし『搜神記』では人間の運命は「閻魔帳」に書かれているとあり、琉球諸島各地の民話では人間の福分の基準は水を入れる容器の大きさによって示されるというものもあり、星の輝きをもって福分の大きさを語るのは本部町健堅集落の照屋松吉翁のみである。

三 群星御嶽の由来 - スバルの降下 -

【例話18】

南風野屋は川平村の始まりであると共に、宗家として村人からも尊敬されていた。同家に心の美しい、行いの正しい娘がいたという。その娘がある日の夜中に目をさまして外に出て見ると、不思議なことに群星が中天にさしかかった時、細長い円筒形の霊火が群星と地上を昇降しているのを見たという。自分の錯覚ではないかと思っていると、その後も前と同じ時刻に、同じような霊火をしばしば見たので不思議に思い、家の人や村の長老、先輩などに話したところ、みんな驚き怪しみ、その霊火はまさしく神の天下りであろうと深く信じた。そして霊火の昇降する所を調べたところ、白米の粉で丸くしるしが記されていたので、神の天下りされた所は此所だとして、そこに一社建てて拝んだという。これが群星御嶽で、村の御嶽の始まりであり、村人の信仰の中心になった。村の一大会事の結願祭はこの御嶽で行う。その他の神行事もこの御嶽を中心に行っている。

霊火を見た娘はその頃は、煮たものは食わず、生米を水につけて摺鉢ですった汁しか飲まなかったといわれ、これも神に仕える前兆であるとして神司になったといわれている。

神元は南風野屋であるので、神司は同家の系統より出るということである。（『川平村の歴史』川平公民館、1976年）

琉球諸島の多くの御嶽の由来について、霊火が現れた場所を拝んだら霊験があったからという話はある（石垣市平得の「福山御嶽」^{いなしきおん}や小浜島の「川田御嶽」^{かた}など）。しかしその霊火の正体を星、それも群星に結びつけたのが石垣市川平の群星御嶽（ンニブシオンまたはユブシオン）の由来である。群星とは、ンニブシあるいはムリブシすなわちおうし座のプレアデス星団、スバルのことである。

1705年に八重山蔵元で編集された『八重山島由来記』には、八重山における御嶽の名とその由来が記されているが、川平村の御嶽に見える「稲ほし御嶽」が群星御嶽のことで、群星の方言の「ンニブシィ」を「イニフス」と誤り「稲ほし」と宛字したものであると解されている。しかし『八重山島由来記』では「稲ほし御嶽」も「由来不相知」となっているので、『八重山島由来記』の編集当時、「稲ほし御嶽」の由来は知られていなかったようだ。そうすると上記のような由来は、少なくとも『八重山島由来記』以降に作られたことになる。

そもそも川平村の上記の「群星御嶽」の由来は、早野（旧南風野）家系図なるものに見える記事に基づいている。南風野家の記録によれば、南風野という屋号は、「仲底原」の南端、現在の烏帽子石を庭石として構え、部落の南に位置していることから「南之屋」と呼ばれるようになったとした上で、「稲干御嶽ト南之屋、同時代ニ」云々と上記の由来とほぼ同じ内容のことが記されている。このことから、ンニフシからイニフシ、そして稲ほし（干）に誤ったのではなく、逆に「稲ほし」という名称からンニフシそして群星へと連想し、霊火を星に見立ててスバル星の降下という由来が作り上げられたのではないか。川平村では大正5年（1916）に扁額を「群星」に書き改めたというから、近代になってからかも知れない。

四 その他 - 民話の中の星 -

(1) 星の誕 - タツァーギ星^{ボス}

【例話19】

南国の夏の訪れは早く、真紅^{あかよーら}の梯梧や真白な鉄砲百合の咲き乱れるウルジインの季節があつという間に過ぎると早や若夏です。

だが、その南国にも四月の下旬頃にちょっとした寒の戻り・落ち寒波^{うていびらふ}があ

ります。この落ち寒波の北風に乗ってヨーカニシイ（和名あまさぎ、波照間ではヨーカドウル）が島にやってきます。ヨーカニシイはその美しい白い姿で田んぼや沼に下り立ち、人の目を楽しませてくれます。

そのころ、夕方になると、西の空に赤いタツァーギ星^{がす}が不気味な姿を現します。ところで、この赤い星が西の海に沈むと、星はたちまち潮にとけて海を赤く染めるといことです。この赤い潮を島では「星の涎」^{がすぬゆだりい}と呼び、猛毒があるといっています。もし「星の涎」が海中の蟹やぎら（シャコガイ）の棲むところに流れてくると、その毒はたちまち蟹やぎらの体中に入り込み、これを食する人があれば猛烈な中毒を起こすと言われます。だが、島の人たちはその毒消しの方法を知っています。そのころに沢山とれる季節の野菜「なすび」や「しそ」を、取れた蟹やぎらと一緒に鍋に入れてゆがげば、毒はなすびやしそに吸い取られて、何ら心配はないといことです。（『老いて学べば - 竹原孫恭遺稿集 -』私家版、1978年）

八重山では旧暦4月下旬頃に吹く北風をヨーカニシと言う。八重山博物館所蔵の「星図」には星や星座と風の関係が記されているが、「六ツ星」の箇所、旧暦の4月7・8日ごろ、太陽が沈む時分、六ツ星（スバル）が入没する時、7～8日、吹く北風を俗に「やうかにし」と言うといえる。ちょうどこの頃にアマサギの群れが飛来するため、この鳥を「ヨーカニシ」と呼ぶようになった。

この時期には八重山の沿岸には「赤潮」が打ち寄せられる。普通、赤潮といえばプランクトンの働きによって生じるものであるが、梅雨入り時期に八重山の沿岸に打ち寄せる「赤潮」は、その赤潮ではなくスリックと呼ばれるサンゴの卵・幼生の帯状集合体が漂着したものである。サンゴの卵は漂流しながら受精し海底に着地するが、受精しなかった卵は波間を漂っている間に赤い帯になって海岸に漂着するのである。それを宮古島ではインズー（海の血）と呼び、八重山の人々はこれを「星の涎」^{がすぬゆだりい}とか「星の汁」^{がすぬしいりい}と呼んだ¹⁰⁴。

「タツァーギ星」については諸説ある。宮良当壮『八重山方言辞典』は「二月頃夕方中天にありて五六月には西天にある星。立上げ星の義」とあり、内田武志は宮良当壮の説を参考にしながら、これを大犬座のシリウスに宛て、語義を「辰上げ星」とした¹⁵⁾。宮城信勇『石垣方言辞典』には「ムリカブシィ（すばる星）の一つ」と記している。これに対して大仲浩夫『八重山の気象と自然暦』（私家版、1986年）、正木譲「島の歳時記（04）」（『八重山毎日新聞』2009年3月5日付）はいずれもオリオン座の三つ星周辺の星々に宛てている。

恐らくタツァーギブシィを漢字で表したのが八重山博物館所蔵の「星図」に見える「立明星」であろう。「卯ヨリ出テ酉ニ入ル」「五月二十五日頃、日入時分ヨリ六月二十日頃迄ヨドム」「十一月七日頃ヨリ同十日頃之間、日入時分卯ヨリ出」とある説明書きからすれば「立明星」はオリオン座と見て間違いない。ただ「星図」に描かれた「立明星」の星図線は現在のオリオン座のものとは違っている。民話では「赤いタツァーギブシィ」と言っていることからすれば、三つ星周辺の星々だけでなくベテルギウスも含まれていたと見られる。「星の漚ほすぬゆだりい」とか「星の汁ほすぬしいりい」というのは、「赤いタツァーギブシィ」が西の海に沈む時に、その星の赤色が海に溶けて海面を赤く染めると考え、それがあたかも漚または汁のように見えることから名づけられた八重山地方独特の言葉である。

（2）星砂の由来 - 北斗七星とスバル

【例話20】

子の方向にある星を父星と言い、午の方向にある星を母星と言う。

ある日、母星がお産をしたいとのことで、天の大明神に申し出た。大明神

¹⁴⁾ 正木譲「島の歳時記（10）」（『八重山毎日新聞』2009年3月27日付）

¹⁵⁾ 内田武志『星の方言と民俗』（岩崎美術社、1973年）110頁。

は竹富島の美しい、広い南の海に降りてお産をするよう命じた。母星はその通りに竹富島の南の海に降りて、沢山の子供を産みおとした。すると、海の係の七竜宮神が、

「自分の所有のこの海を、母親が勝手にお産の場所に使ったことは決して許せない」

と、海の大蛇を使って、星の子供を全部かみ殺させた。大蛇が食べた星の子供の骨がフンとなって、南の海岸に打ち上げられたのが星砂である。

島の東美崎の神は、この星の子の骨をひろい集めて自分のそばに祀り、いつか天国に帰してやろうと考えていた。そのことから御嶽の神女は必ず、香炉の星砂を年に一度は入れ替える習慣が残っている。そして、島の神女のおかげで、星の子は昇天しているのです、午の方角の母星のそばに多くの子星が光っていると言う。（上勢頭亨『竹富島誌 民話・民俗篇』法政大学出版局、1976年）

星砂とは、単細胞生物の一種バキュロジプシナという有孔虫の抜け殻が砂浜に打ち上げられたものであるが、丸く膨らんだ中心部の周りに数本の白いとげが伸びている形が星の姿をしていることから、この星砂を星の子供とみなした竹富島特有の伝承である。

話者の上勢頭亨は、この話を当時97歳になる神司の仲盛マイツ媼と92歳の前我名釜多翁から聞いたという。星砂は北の父星と南の母星の間に生まれた子供をかみ殺した海の大蛇の糞が竹富島の南海岸に流れ着いたものが星砂であるという由来と、竹富島では香炉の砂を年に一度取り替えるのは星の子供の骨を母星の元へ帰してあげるためであるという、二つの由来譚になっている。

なお、上勢頭亨は北の父星は北斗七星、南の母はスバルとは語っていたともいう¹⁰⁰。それにしても天帝の勧めで竹富島の南の海で出産したが、海の神

¹⁰⁰ 下嶋哲朗『沖繩・聞き書きの旅』（刊々堂出版社、1983年）75頁。

の怒りを買ひ、海の大蛇にかみ殺させたというのは、天の神と海の神の領域をめぐる争いの悲劇とも言える。

(3) 鯨になった牛 - タタシ星

【例話21】

昔々、波照間島に親不幸な男がありました。或年の秋のことです。大雨が降って田んぼに水がいっぱい張ったので、牛に田を踏ませようと、七、八頭の牛をひいて下田原の田んぼに出かけました。

パティルマは島が小さく、山や川がありません。それでタダシ星の見える秋の頃、大雨が降って田んぼが水でいっぱいになると、牛を入れて一日中田んぼを踏ませるのです。こうして十分踏まれた田んぼは、雨が遠のいても水のかれることがなく、田植えが出来るのです。

男は田んぼの中で牛を一列に横に並べ、鼻と首を綱でつなぎ、左側の牛を田んぼの真ん中におき、右側の牛を振り回すように“ホーイ、ホーイ”と追い立て、追い立て、しきりに田を踏ませていました。丁度そのとき、何のまえぶれもなく津波が襲って来て、田んぼで働いていた男を牛もろとも海にひっさらってしまいました。

親不孝な男は海の藻屑となり、行方知れずになりましたが、牛だけは死にませんでした。昔から牛は蹄にのりの生えるまで、馬はサカギシャのつくまで泳ぐと言われていますが、この牛たちも一頭も溺れ死ぬことなく泳ぎ続けました。

大海原の中で牛たちは群れをつくって、島をさがし求めて、幾日も幾日も泳ぎ続けましたが、どこにも鳥影は見当たりません。それでも牛たちはあきらめません。すき腹を抱えながら、辛抱強く、夜も昼も泳ぎ続けていましたが、そのうちにとうとう鯨になってしまい、海で生きようになつたということになります。

毎年秋になって牛に田んぼを踏ませる頃になるとパティルマの沖に“モウ、モウ”と牛のような鳴き声をたて、潮を高く吹き上げてやってくる鯨の一群があります。鯨たちは島の近くを泳ぎ回って遊び、稲刈りの終わる頃どこかへ行ってしまいますが、あれは、いつかの津波のとき、海に押し流された牛たちで、生まれ故郷のパティルマが恋しくて忘れられず、毎年秋になると、きっとやって来るのだということでもあります。（竹原孫恭『ばがー島 八重山の民話』私家版、1978年）

波照間出身の仲本信幸（明治30年生まれ）によって伝承された話であるが、これに似た動物昔話は渡嘉敷島でも聴取されている。渡嘉敷村字阿波連の大宜見信行（明治41年生まれ）が語る話では、怠け者の牛が陸でこき使われるのを嫌って海に逃げ込むが、竜宮でもやはり同じようにこき使われたため、竜宮を抜け出し近海で鯨となって泳いでいた。それで竜宮の神は怒ってシャチに鯨の殺害を命じ、シャチは鯨を探してその角で突き殺したという。末尾では、「鳴くときには『ンモー』と鳴くでしょう。牛も鯨も」と、鳴き声と同じなのは鯨がもともとは牛であったためと伝えている（『とかしきの民話』）。

渡嘉敷村と座間味村からなる慶良間諸島の海域には、毎年冬になるとザトウクジラがやってくるが、波照間沖にもマゴンドウ（ゴンドウクジラ属）が群れをなして泳いでいるのが見えたりする。波照間島では秋の「踏み耕」の時期に波照間沖にやってくる鯨を見て、これは津波に流された牛が鯨になってふる里に帰って来たと考えたのである。

波照間島の民話では「踏み耕」の時期を表すのに「タタシ星」を登場させているが、波照間島では、「ムリブシネの雨で麦を蒔け」「タタシネの雨で粟を蒔け」という言い伝えがあり、ムリブシはスバルのことで、タタシはオリオンの三つ星のこととされる¹⁷⁾。「星図」の「立明星」のところには「粟

¹⁷⁾ 島村修『島の自然を守る』（南山舎、2011年）212頁。

蒔最中」と見えるので、波照間島の方言でタタシ星と言っているのは「立明星」すなわち石垣方言のタツァーギ星と同じであろう。

(4) 油雨-五つ星

【例話22】

昔、波照間島では、人口が増え土地や食料が不足し、人々の間で醜い争いが起きるようになったため、怒った神様は油雨を降らせて島を焼け野が原にした。日頃から正しい行いをしていた男女2人だけが「ミンクの洞窟」に隠れて難をのがれた。成人した2人は夫婦となり、子供ができたが、最初の子は海のポーズ（ミノカサゴ）、2番目はムカジ（ムカデ）で、3番目にしてやっと人間の女の子が生まれた。そこで天の五つ星を見て四隅と中央に柱を立てる堀立小屋を思いつき、家を造り住むようになった。その後、波照間島は栄えたため、女の子は「^{あなばりやこ}新生の婆」と呼ばれた。

竹原孫恭『ばが-島 八重山の民話』に所収された、仲本信幸が語る「油雨」の梗概であるが、その中に「五つ星」をヒントに家造りをしたことが語られている。

波照間の「やーすくり（家造り）ジラバ」には「ゆつあしい（四つ星）」とあり、それはベガス座に宛てられることが多い。しかし本話では、四辺形を形成する四つ星と、その中にあるもう一つの星を以て「五つ星」としている。そうなるこの場合は、四辺形の中に全く星がないベガス座よりも、三つ星のいずれかの星を家の中柱に想定できるオリオン座と見なした方がよいように思われる。

(5) 天の星石

【例話23】

昔、大浜の高田原たかだばるの畑の中に、大津波で打ち上げられた大きな石があり、それを天ぬ星石と呼んでいた。高さが3メートルもあり、上部が一坪ほどの平たい石であったが、この石の上で、部落の役人が、シンスキヤーと言って13歳になった男女を集めて宣教を行ったらしい。天の星を見て、この星が上がって何日には粟作り、米作りの時期、またこの星がどの位置に来たら収穫の時期と言って教えられた。大東亜戦争で壊されて現在この石はないが、この畑の地番はそのまま残っている。それは現在自分たちが作っている畑の中にあって、年に一回、8月のミズの日に祝いをした。ヤーライタと言ってお父さんお母さんから教えられ、今でもこの畑は部落で名を得た畑だからと言って、やっぱし残っている。（立命館大学・大谷女子大学・沖縄国際大学三大学合同民話調査テープより）

大浜の島尻松（明治39年生まれ）が語った話の方言訳である。大浜の高田原に津波によって打ち上げられた大石があり、その上で大浜村の役員が13歳になった男女を集めて農業の時期と星の関係についてレクチャーをしたという。「天の星石」というのはそこから名付けられたものであろう。その石は大東亜戦争（太平洋戦争）で破壊され、この話が聴取された1976年当時すでに無くなっていたようである。

なお1976年に刊行された大浜老人クラブ長寿会編『大浜村民俗誌』には、「大浜地域に打ち上げた津波大石」として高田原にある「無名石」が挙げられており、「墓に利用されている」と記されている。大浜では、あの世の正月と言われる「十六日祭」に、津波で流された身元不明の人が葬られたと見られる高田のティンヌフシィにお参りしていたという話もあり、その「無名石」がティンヌフシィと呼ばれていた可能性もある。しかし、もともとティ

ンヌフシイという墓のある畑を所有していた家の子孫は、その言葉が天の星の意味かどうかはわからないという。その畑は後に売却され、島尻家の人々が耕作するようになったが、本話はティンヌフシイを天の星の意味に解した島尻家の中で伝承されたものに違いない。

(6) フシクブ (地名) の由来 - 隕石落下

【例話24】

国頭郡辺戸邑北、名を宇座^{うざ}原^{はら}地^いと日^ひふ。太古の世、一夜、星^こ此^こに落ち、似て^{わかん}窟^{つく}坎^{かん}を為^{つく}る。坎形長円にして、深さ七尺、長さ十間、広さ五間なり。今世人、呼びて「落星窟」と日ふ。(『遺老説伝』)

『遺老説伝』は琉球王府が『球陽』(1745年)の外巻として、各地の古老により語り継がれてきた伝説・昔話を編集したものであるが、その中の唯一、星に関わる話の現代語訳を揚げた。国頭郡辺戸村北方の宇座原に、深さ七尺(約2メートル)、長さ十間(約18メートル)、広さ五間(約9メートル)の楕円形の窪地があり、それは隕石が落ちてきたもので、地元では「落星窟^{うていふしくぶ}(窪)」と呼んでいるという。『国頭村の今昔』(沖縄風土記刊行会、1970年)によれば、辺戸集落の海の手の郊外に、星窪と呼ばれる原野があり、そこは周囲の地形に比べて陥没したような形になっていた。またそこには二百坪ほどの水田があり、星田と呼ばれていたようである。また人々は川から水を引き、その窪地を大きな貯水池として利用していたという。

ヤンバルクイナ展望台から内陸部方面にあたる一帯のようだが、現在は松林が生い茂っていて面影はない。

【例話25】

星クブン(星の窪み)は、野嵩の前の方にあるんだけどね、村境に。星ク

ブンといって、私も昔話を聞いているだけなんだ。そこは本当に窪んでいたよ。その後方に住んでいた三世相に会いに行きながら見たんだよ。

星が落ちて窪んだって。そのわけは聞いていないさ。ただ星が落ちて窪んだそうだよという話があったんだ。（『宜野湾市史』第5巻 資料編4 民俗、1985年）

宜野湾市の旧普天間国民学校の運動場跡はホシクボと呼ばれていたようであるが、現在は埋められている。この民話にあるフシクブンは宜野湾市野嵩二丁目にあった大きな窪地で、水が溜まって子ども達がよく水遊びをしていたというが、現在は埋められ住宅が建っていて面影はない。これらの窪地は、石灰岩が浸食、溶食されてできたドリーネであるが、往古の人々は星が落ちてできた窪地と語り継いできたのである⁸⁸。

なお『宮古島旧記』には、隕石落下を思わせる記事が載っている。

久貝村在所かたいら与那覇筑登之家へ天より石が落下したこと。康熙五拾卯年五月の頃、大雨ふり雷電なりはためきて、午の刻、虚空より石落ち来り家人驚き恐れて箱入にして、同村与那覇筑登之家へ保存したとの事

すなわち、康熙50年（1711、尚益王2）5月、大雨大雷があった日の午の時刻（午前11時～午後1時）に、宮古島久貝村の与那覇筑登之の家の庭

⁸⁸ 沖縄本島にはこの他にもフシクブ（星窪）と呼ばれている場所がある。金武町伊芸地区のシッチ原にはかつて526平方メートルの土地が深さ5・6メートルくらいの窪地となっていたという（安富祖一博『村の記録』私家版、1983年）。北谷町の東南にあった石平屋取集落には、フシクブと呼ばれる共同井戸があり、そこは星が落ちて窪んだという言い伝えがあったという（北谷町文化財調査報告書第24集『北谷町の地名』44頁）。沖縄市嘉間良三丁目にもフシクボ（不志久保）と呼ばれている窪地がある。なお2010年に天底小学校に統合されたが、今婦仁村の湧川小学校が建てられたのは星窪という場所で、校歌にも「乙羽の山の東に 常磐の松の生い茂る 流星降り立つほしくぼの ここ高台に聳え立つ 我が学舎の湧川校」と歌われている。

なお、奄美大島北東部に位置する直径約3キロメートル、周囲約10キロメートルの円形をした赤尾木湾は隕石孔であると言われている。その近くに直径約200メートルの円形の窪地があり、星窪の地名も残っている。

に、空から石が落ちてきたという。この話は『球陽』巻9にも取り上げられている。

おわりに

琉球諸島は星を題材に取り入れた民話が全国的にみても卓越しているが、とりわけ八重山諸島に集中している。ニヌファブシ（北極星）の由来や星女房などには、アイヌや中国の民話の影響が見られるが、それ以外の多くの話は八重山独自の内容となっている。しかも星や星座の由来だけでなく、星が他の年中行事や習俗または言葉の由来などにも結びつけて語られている。なお八重山諸島には星を謡った古歌謡も多く¹⁰⁹、そこにはユニークで味わい深い文学的表現が見える。さらに八重山博物館所蔵されている『星図』を見る限り、先人たちはよく星を観察している。それは日常生活の中で、農作物の植え付けと収穫時期を判断し、また航海にあたって風の動きを知るためにも重要であったためである。こうした精神風土があったからこそ、星に関する多くの民話が伝承されてきたのであろう。

¹⁰⁹ 拙稿「八重山歌謡に謡われた星」（『日本東洋文化論集』13号）